# かなたへ　第十一部　海の日紀行

ＵＢＯＢ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かなたへ　第十一部　海の日紀行

【Ｎコード】
Ｎ８５０８Ｋ

【作者名】
ＵＢＯＢ

【あらすじ】
夏休みにはいり、ハルヒは再び海へ遊びに行くことを宣言した。

## 第一章　今日は、海の日　第１節　（前書き）

かなたへ　第十部　地上の銀河第　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８２４７ｋ／　の続きです

# 第一章　今日は、海の日　第1節

人と同じことが嫌なくせに、おきまりの行事は押さえておきたいという二つの命題に伴うアンビバレンツがどのように処理されたのかは俺の知るところではない。夏休み初日の土曜日の朝、いきなりハルヒから集合のメールが来た、その時には俺あずかり知らない所で俺の運命はもう決まっていたのだろう。

休み初日の朝ぐらいゆっくり寝かせてくれとの俺の抗議が聞き入れられるはずも無く、大急ぎで朝飯を掻き込み、駅前の集合場所に俺が着いた時刻にはやはり他の5人はすでに勢揃いして　いた。

「さ、今日もキョンの驕りね、すこしは進歩したのかと思ったけど、やっぱりキョンはキョンね、安心した。

手早く冷たいのをキューってやって行動に移りましょう」

訳もわからぬままいつもの喫茶店に引きずられる様にして入る。こら、かなた、俺が引きずられるのがそんなに面白いのか？

「いいえ、そうやってハルヒ先輩を安心させてあげるキョン先輩が優しくて良いなって……」

「かなたちゃん、妙なこと言っておだてちゃ駄目よ。

ちょっと甘やかすとこの通り遅刻するんだから」

待て、まだ集合時間の5分前だぞ。

「キョン、いい加減学習なさい、団長より遅れてくれば、即遅刻よ。

世の常識をもっと身に着けなきゃだめね」

「涼宮さん、仲が良いからってあまりキョン君を苛めるより、せっかくですから気持ち良く奢ってもらった方が良いじゃないですか」

古泉、それ、何のフォローにもなっていないぞ。

いつもと同じ光景、そう、いつもと同じ、これが始まりだった。

「さあ、みくるちゃん、今日は何の日か、分かってるわよね？」

「えぇー、夏休みの最初の日で、土曜日でしょ、外に何かありましたぁ？」
「みくるちゃん、甘いわね、キョン並みの甘さ、この白玉クリームあんみつ以上に甘いわね」
どうせハルヒがとんでもないことを思いついた日なんだろ。
「キョン、寝言は寝てる間だけにしなさいよね。
かなたちゃんなら、分かる？」
「涼宮先輩が大きなバッグをもってきておられますから、
きっとお買い物の日ですよね。
だから、どこかへお出かけする準備ですか？」
「いいところ、突いて来るわね。
古泉君、副団長なんだから、貴方なら大丈夫よね」
「先ほどのかなたさんの答えとカレンダーを見比べれば、
『海の日の二日前』が正解ではないでしょうか？
早速、いい海岸を手配しましょうか？」
古泉、ハルヒと何かつるんで仕組んだのか？
「滅相も無い、涼宮さんのお考えを推察しただけです」
「やるわね、古泉君。
そう、もはや国民的行事となった海の日をわがＳＯＳ団が見過ごす手はないわ。
古泉君、場所とかは目処がついてるの？」
満面の笑みで身を乗り出したハルヒは、そりゃ、可愛かったさ。

## 第一章　今日は、海の日　第２節

水着を持っていないというかなたの話しから、何をどのように間違ったのか女子団員４名は真っ先に水着を買いにいく事になった。
「エロキョンの目に毒だから、男の子達はシュノーケルとか、キャンプの用意とか、適当に探してきてよね。お昼にあそこのイタリア料理のお店に集合しましょ、キョン、古泉君をちゃんと連れてくるのよ」
というわけで、何が悲しくてか、今俺は古泉と並んで買い物だ。
「去年行った島でも良いのですが、またクローズドサークルで事件を計画するのも大変ですので、この度は、去年渡る途中で立ち寄った島のキャンプ場とログハウスを予約しておきます。めったな事は無いと思いますが、今回も森に同行を頼もうと思います。
宜しいですよね？」
俺に聞いたってしょうがないだろ？　それより、古泉は前に言っていた釣りがしたいだけじゃないのか？
「まあ、それも否定しませんが、今の涼宮さんは貴方が了解されたのなら、それを拒んだりはされないと思いますがね。
ちょっと連絡を取りますので暫く待っていただけますか？」
仕方なく一人でゲームセンターに入ると新作の格闘ゲームを見つけて合わせコマンドの入力とタイミングの習得に励むこととなった。
３０分ばかりして　古泉が戻ってくると、足ひれ、水中眼鏡、シューノーケル、浮き輪や小さなゴムボートなどを買い込み、昼前に集合場所のイタメシ屋の前にたどり着く。釣具や　浜辺バーベキューの材料や道具は古泉の親戚と称する機関が手配をしてくれるらしい。なんとも豪勢な事だ。
暫くして荷物をかかえて楽しそうに現れたハルヒ達も現れ合流する。
結局４人とも水着を新調し、ついでに夏のリゾートウエアだかな

んだか知らない　が、服やら、日焼け止めやら、なぜか花火を買い込んできたらしい。
うれしそうに話すハルヒ、よほど4人での買い物が楽しかったのだろう。おいこら、こんな所で水着引っ張り出して見せなくてもいいだろ。
必死でなだめる俺にきょとんとした風情のハルヒ。
おまえ、もう少し人目とか考えたほうが良いぞ。
「何よ、キョン。水着ぐらいで何赤くなってるのよ、かなたちゃんのなんか凄いんだから。いい、かなたちゃん、絶対にバレオとっちゃ駄目よ。
このエロキョンが鼻血を出して死んじゃうからね」
いったいどんな水着を買ったんだ？
食事がすむと追加で頼んだドルチェを待つハルヒに古泉が予定を説明する、おい、俺が納得したとか、希望したとか、まことしやかに変な説明をするんじゃない。
翌朝、荷物を持って集合ということで、イタメシ屋を出ると珍しくすんなり解散になった。

## 第一章　今日は、海の日　第３節

ミヨキチとプールに行く約束があるという妹をこれ幸とバッグから引き剥がし待ち合わせ場所に着いたのはハルヒと同時だった。ハルヒ、これなら遅刻じゃないよな。

「遅れては無くても早くもないでしょ、遅れたも同然よ」

訳のわからない理屈をまくしたてるハルヒと共に森さんの運転する車に乗り込む。

「島の道は少々狭いですので、今回の車は前の車より少し小さくいたしました。

狭いとは思いますが、よろしくお願いしますね」

良かった、妹が付いてきていれば俺が膝の上にのせなくてはならないところだった。

「キョン、いくら兄妹でも小学校六年にもなってれば、それはセクハラよ」

ハルヒ、お前はどうあっても俺を変態にしたいのか？

「いいこと、エロキョン、かなたちゃんの水着がエロイからって変な考えおこしたら死刑よ！」

いったいどんな水着なんだ、早く拝まさせてくれ。

「駄目よ、海の日は明日。

海のイベントは明日までお預け。

古泉君も良いわね」

「もちろんその様に計画してあります。

今日は島に着きましたら宿になりますログハウスで荷物を降ろしていただき、その後、島のドライブと散策を予定してます。

昼食の方は、島とは言っても大変眺めの良い山がありますので、そちらで用意させています」

「さすが、古泉君、分かってるわね。

というわけで、キョン、明日までお預けだからね」

俺は、犬か？

フェリーで渡った島は思っていたより大きな島だった、島名産の醤油やら油なんかの工場や高校まであるらしい。森さんの運転する車は一路、入り組んだ海岸の狭い道をぐるぐると走っていく。こりゃ大きな車だとすれ違うのも大変にに違いない。２０分ばかり走ると、車は山の斜面にある細い獣道のような側道に入った所で停車した、まさか道に迷ったんじゃないですよね、大丈夫なんですか？

「着きましたよ、ここが今日の宿になります。

チェックインをしてきますからすみませんが荷物を降ろす用意をしてください」

見ると確かに道の脇にログハウスが建っている。

俺たちは森さんの指示に従い、荷物を持ってログハウスへ向かう。ほんの半間ほどの狭い入り口を入ると靴を脱いで二階に案内された。女子四人は大部屋に補助ベッドを入れてもらい、俺と古泉とは小さめのベッド二つの部屋に案内される。

ちょっと床が傾いている気がするが、これも風情の内なのか？

窓からは入り江の海が真正面に光っている、泳ぎたい！

「駄目よ、キョン、お預け。

さ、お茶いただいて一休みしたら出発よ。

早く行かないと昼時に間に合わないじゃない」

その後、皆を乗せた車は島の中腹に有るロープウエーの乗り場に到着、森さんは車で山頂の駅を目指し、俺たちはロープウエーで緑生い茂る渓谷を登って行く事になった。

谷合いから下を見下ろすと真っ青な海、見上げればさまざまな種類の緑とそれを彩る花々の色の間にそびえる岩壁。野生の猿すら居るというが、さすがに猿までは見えないな。

かなたはロープウエーの窓ガラスに張り付くようにして眼下に広がる無数の命にあふれる渓谷に見入っていた。

「私の故郷の星を、宇宙を、この地球の様に絶対多種多様な命にあふれたものにしたいです。手を加え、干渉さえしなければ元々あったはずのこんな風景の大切さを伝えるため、私、もっと調査しなくっちゃ」

俺だけに聞こえるようにそう囁く。

ハルヒは懸命に腕を振り回しながらロープウエーが遅いと息巻いている。

いま、下りのにすれ違ったからちょうど半分だ。それに森さんだって曲がりくねった道を登るんだから、まだまだ時間がかかると思うぞ。

「分かってるわよ、でも、私は早く行きたいの」

ハルヒ、お前だけは絶対に運転免許をとるんじゃないぞ。

昼食の後は車で海岸線の名所を見て歩く。醤油ソフト、佃煮ソフト、スモモソフトなんぞの看板を見つけるたびに車を止めさせ、ここでも全種類制覇を　宣言したハルヒはそれぞれ堪能している。俺も醤油ソフトを食べてみたが、意外に風味が良くて少々驚いた。朝比奈さん、長門、かなたも一緒に全種類制覇をする様だ。ま、一箇所でまとめて食べるんじゃないから花見旅行の帰り道での様に腹を壊す事もないだろう。

夜の食事はログハウスで振る舞われた海産物中心のメニュー、ハルヒも満足そうにしているのを見て俺も一安心したのだが、もちろんこれで終わりってことは無い。部屋に戻り、一服してログハウスの風呂で汗と疲れを洗い流しているとハルヒから呼び出しがかかった。

「さあ、真夏の夜のお楽しみよ、海岸で花火大会を始めるわよ」

かわいらしく線香花火をする朝比奈さんとか、爆発の直前まで火のついたネズミ花火を人形のように持ってる長門だとか、打ち上げ花火に号令をかけるハルヒだとか、花火のポンという爆発音にいち

いち頭をかかえてしゃがみこんで泣きそうになるかなただとか、ま、見所は沢山あったわけだが割愛する。

事件は、深夜に起こった。

## 第一章　今日は、海の日　第４節

皆が寝静まった深夜、喉の渇きに小銭を持って部屋から出るとそれに続くようにハルヒが部屋から出てきた。
ハルヒ、おまえも喉渇いたのか？
今ジュース買うから、待ってろ。
「夜は甘いものは止めておく、お茶、お願い。
ふぅ、和食も良いけど、あれだけ食べると喉が渇くわね。
キョン、ちょっと外に出てみない？」

さすがに深夜ともなると山から吹き降ろす風も心地よい。二人並んで海岸へと再び歩いていく。
「キョン、上見てごらんよ、星、綺麗よね」
沖を通る船の明かりと、灯台の照らす光、そして月の光。
背後は漆黒の闇。
天には大きく銀河が広がっている。
ディスプレーを通してならもっと凄い星の海を見たことは有ったのだが、生で見る星空は一段と素晴しい。ありがとう、ハルヒ、いい星空をみせてもらった。

海岸にたどりつき、振り返るとハルヒの姿が見えない。
「ハルヒー！何処だ！」
必死になり呼ぶ俺に岩陰から返事が返る。
「何真剣に私の事を呼んでるの、何処にも行かないって。
ちょっと待ってよね」
事、ハルヒに関して言えばどんな不測の事態もありうるものと学習してきた俺にとっては、マジ心配だったんだが、ハルヒの声はいたって暢気なものである。
暗がりになれた目がやがて現れたハルヒの姿を捉え、息を飲む。

夜目にもまばゆい純白のビキニ。
「キョン、ほら、これ、あんたの水着。
どうせ履いて来ていないでしょ。
ほら、直ぐ着替える！」
ま、待て、何のことだ？
「午前零時を回ったわ、そう、海の日。
水着解禁よ。
何もたもたしてるのよ、私が脱がせてあげようか？」
俺は大急ぎで岩陰でハルヒから受け取った海パンに履き替える。
見ると天女の羽衣よろしく近くの松の枝にハルヒの浴衣がかけてある。俺のも並べてかけると、風で飛ばないように浴衣の紐で枝に通した裾の所を括っておく。
戻るとハルヒはもう、下駄を脱いで岸辺に足をつけている。
「遅い！
女の子をこんなところに待たせるもんじゃないわよ。
さ、乗って」
いつの間に用意したのか、小さなゴムボートが岸辺に浮かんでいる。
事の異様さに気付かぬまま、俺はハルヒとボートに乗り込んだ。
小さなボート、向かい合って座っても互いの足が触れ合う。ゴメンと慌てて足を引っ込める俺に、
「バタバタ動かない、ひっくり返るわよ」
それもそうだ。
「でもの、座ってると重心が高いのよね、
横になろうよ、で、空、見るの」
ゴソゴソとハルヒは俺の方に這い寄ってきた。
ハルヒがそう言うなら、そうするしかあるまい。俺もゴソゴソと

足元のほうへと動き仰向けに横になると、俺の右腕の上にハルヒの頭がチョンと乗った。
最初の時間軸での最後のミッションの時と同じように。

「キョン、宇宙って、広いよね。
でも、こうやって見えている銀河と同じようなのがまだゴマンとあるのよね、
そんな中のたった一つの銀河、そのなかの何十億の太陽の中もたった一つの私たちの太陽、
そこに住む六六億の人間の中のたった一人、
あ、キョンもいるから、たった二人よね。
凄く、寂しくない？」
「でもな、ハルヒ、俺は思うんだ、人間って本当に小さな世界の小さな生き物だろうけど、
それが、こうやって意識を持って、知恵を持って、こうやって全宇宙を思い描く心を持ってる、
お前の中にも、俺の中にも、全宇宙がある。
そう思うと、捨てたモンじゃないと思うんだ」
「やっぱり、キョンは変ね。
いつからそんな哲学者みたいな事を言うようになったのよ。
でもね、キョンじゃないけど、こうやって誰かと一緒にいるのも、悪くないかもねって、この頃、思うようになった。
私も変わったのかな」
しばしの沈黙に星空を唯じっと見上げる。一点を見ていると、一瞬視界が真っ暗になる、目を動かすと、再び星々が全天を覆っている。錯覚か？
ふと、横をみるとハルヒは目を瞑って穏やかな息をたてている、寝ちまったのか？
その時、俺の左腕の時計がビビビと震えた。

ＹＵＫＩ．Ｎ＜　貴方、無事？
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　キョン先輩の存在がロストされました。返事してください！
無事だ。時計に囁く。
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　返答を確認した、存在場所は？
ログハウスの前の海岸だ、ゴムボートに乗ってる、ハルヒと一緒だ。
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　そこまではトレースしていたんです
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　でも、さっき、急に存在が感知できなくなったんです
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　海上に閉鎖空間の出現を確認。古泉一樹に出動を依頼する。
マジか？
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　涼宮先輩はキョン先輩と二人だけの世界を求めてるのかも
ハルヒを起こしてみる。ハルヒ、起きろ！
「うぅん、キョン、どうしたのよ？」
回りは打ち寄せる波、空には無数の星、だが、あるはずの島影が見えない。
すまん、流されたのかもしれない。漕いで戻るぞ。
幾らなんでもたったあれだけの時間で灯台の明かりも船の明かりも見えないところへ流されたはずは無い、だが、他にどんな言い方がある？
「うそ、キョン、今何時？」
「あれから二〇分も経ってない」
湾から真っ直ぐ出たと仮定して、星の向きから逆方向を目指してこぎ始める。
あたりを見回すが、古泉の赤い火の玉も何も見えない。
ハルヒ、大丈夫か？
「うん、ありがと、不思議だけど、怖くないわ。

どうしてかしら、
キョンと一緒なら、絶対キョンが何とかしてくれるって思うの、
変よね」
ハルヒの言葉に振り返ると先ほどまでは見えなかった黒々とした島影が近づいて来ているのが目に入った。だが、灯台の明かりは無いし、無論、船のあかりも、ログハウスの門灯の明かりも見えない。

ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　時計の応答にノイズが乗ります
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　キョン先輩、お願い、帰ってきてください
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　海上で閉鎖空間を捕捉した、だが、進入不能
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　貴方に託す、最善を
万事窮すか、俺に託されてもな。

ハルヒ、その、寒くないか？
「平気よ、疲れた？
漕ぐの替わってあげようか？」
まだ大丈夫だ、でも、疲れたら頼むな。なあ、どうして俺の水着まで持ってたんだ？
「私ね、キョンとこうして二人で海に来たかったの、それだけよ」
ハルヒらしいな、お陰でハルヒの可愛い水着も最初に拝ませてもらったしな。
「これはね、今夜だけ。だって、白の水着って、昼間は透けそうで恥ずかしいじゃない」
そうか、俺、その水着のハルヒをつれて自慢したかったのにな。
「何よ、別に、私はあんたの物じゃないのに、どうして自慢になるのよ」
可愛い女の子を連れて一緒に歩いたら、俺でもちょっとかっこいいじゃないか。
中間試験の前、ハルヒがデートでバッチリ決めてきたろ、あの時、俺達かなり目立ってたぞ。

「キョン、それって自意識過剰じゃないの」
はは、それもあるかもしれないけど、でも、ハルヒは凄く可愛くて、絶対目立ってた。
「キョン、朝比奈さんやかなたにだって同じことといってるんでしょ」
なんだ、そんな事心配してるのか？
そりゃ、朝比奈さんは素敵な先輩だし、かなただって可愛い後輩だ。
そういえば、かなたはハルヒのこと、凄く尊敬してるの知ってるよな？
「かなたって、キョンがいるからＳＯＳ団に入ったんじゃないの」
そんな事ないさ、今日もロープウエーでこの島の凄い種類の生物種に感激してた。
生物の多様性とそれについての知識が世界を救うって、これ、お前がかなたに教えてやったんだろ？
「そういえば、最初に私の家に遊びに来たとき、そんな話、したっけ？」
あれが元で、あいつ、生物の勉強が出来るところを目指して勉強してるらしい。
「私、てっきり有希と一緒にコンピュータ関係か宇宙物理か天体か、そんな方面を目指すのかと思ってたわ」
おれさ、ハルヒが好きだ。
「キョン、夜だからって馬鹿なこと口走ったらぶっ飛ばすわよ」
まあ、聞けよ、ＳＯＳ団、続けるために一緒に進学しようって言ったよな、俺もそうしたいと思う、
ハルヒが好きだし、ＳＯＳ団の他の連中も好きだ。ハルヒだって、そうだろ？
ハルヒと、古泉と、長門と、朝比奈さんともかなたとも、一緒に大学に進学して、皆の夢がＳＯＳ団を通してつながったら、俺たちで世界をもっと素敵にできるかもしれないって思い始めた。

「キョン、やっぱり変わったよね、でも、そんなキョンも嫌いじゃないよ。
そうか、キョンにも、かなたにも夢があるんだよね」
ハルヒにだって、夢、あるだろ。
「私、今夜、キョンと海を一緒に見たいって、海で一緒に波に揺られたいって、変だけど、それが夢だったのかな。
キョンが、もっと遠くて、大きなこと考えてるのに、
私、馬鹿みたい」
ハルヒが馬鹿なもんか、俺だってハルヒと二人っきりでボートに乗って、こうやって同じ時間を過ごせて幸せだと思ってる。
「さすがに、海風、ちょっと寒いかな。
風で浴衣飛んじゃったかも、
それとも、天女が飛んでいかないようにキョンが隠したとか」
浴衣、飛ばないように、俺とハルヒの浴衣をいっしょにして、ちゃんと俺の帯で結んできたから大丈夫だ。それにな、たとえハルヒが天女でも、俺、お前の自由を奪ったりしないから、それは。安心しろ。
「キョンの帯で縛っておいて、自由は奪わないって、変なの。
それ、ひょっとして口説いてるつもり？」
そのうち、俺が責任もてるようになったら、そうするかもな。でも、まだ、早いと思ってる。
な、ハルヒ、皆のところへ帰ろう。
「いや、
・
・
嫌、嘘でも良いから口説きなさいよ、
キョンの意気地なし」
前に、言ったろ。俺、ハルヒに嘘はつきたくないんだ。
「馬鹿キョン、その口、喋れないようにしてやるんだから」
ハルヒはやおら立ち上がると俺を引っ張り上げ、キスをした。

おい、ボート、ひっくり返るぞ。

二人して抱き合ったまま、俺たちはボートごとひっくり返る。
「バカキョン、意気地なし！」
浮き上がって笑いながら俺に手を伸ばすハルヒ。

その時、俺たちを照らす灯りに気付く。
「キョン君、大丈夫ですかぁ」
朝比奈さんの声、見るとＳＯＳ団全員と森さんの乗ったボートが近づいて来る。
「やっほー、みくるちゃん、大丈夫よ。
真っ先に海の日、楽しんじゃった」

## 第二章　海の日の夜　第1節

一泊二日の島への小旅行の最終行程、日没の紫の光を僅かに残した海上を行きかう幾多の船の間を縫うようにフェリーは進んでいく。船室を出て屋上の人気の無いデッキの手すりにもたれてちょっと生ぬるいねっとりとした潮風に当たりながら昨夜のことを思い出していた俺に話しかけてきたのは、思いもかけない人物であった。

「昨夜はお疲れ様でした」

森……さん？　どうしたんですか？

「お詫びを申しにまいりました」

滅相も無い、前の旅行の時も、今回も、本当にお世話になりっぱなしです。お詫びしないといけないのは俺の方です。

「古泉から聞いておられると思いますが、涼宮さんの監視と安全の確保は私たちの最も重要な任務です。昨日お二人がログハウスを出られた事はトラップで直ぐに気がつきました。

夜ですし、辺りには誰も潜んでもいない、それほど心配はしていなかったのですが、それでも少し離れて跡をつけさせていただいていたのです。

涼宮さんが水着を着ておられたのには少々驚きましたが、夜ですし、近くの浅瀬で水遊びをされる程度と甘く見ておりました。そのうえまさかゴムボートまで在るとは思っておりませんでした。不覚です」

まさか森さんが俺たちの跡を付いてきておられるとは思っていませんでした、ビックリしました。

あのボートはハルヒが用意していたんじゃなかったのですか？

「いいえ、違います。花火の後にも確認しましたが、何もありませんでした、その後、涼宮さんはお出かけになりませんでしたから用意したのは別の人物です」

それが誰だか分からないけど、どっちにしたって、あれはハルヒ

の無茶を感じながら止めなかった俺の責任です。森さんのせいなんかじゃないですよ。
「いいえ、実はあのゴムボートは古泉が用意していたのです。
古泉もまさか涼宮さんとあなたがボートを見つけて乗ってしまうとは思っていなかったのです。
彼は早朝ボートで入り江の先の突堤に向かって漕いで出て釣りをするつもりで用意していたようです。
最近呼び出される事もめっきりなくなり、気が緩んでいたと深く反省しておりました」
古泉を叱らないでやってください、現場で止められなかった俺が悪いんです。
「いえ、キョン君、あなたは良くやってくださいました。
事実閉鎖空間を破って出てきてくださったんですから。
私たちもボートで古泉や皆さんと共に海上の閉鎖空間の境界には直ぐに着いたのですが今回の閉鎖空間は異例尽くめでした。古泉が閉鎖空間の壁に触れることが出来ても中には全く入れない、不完全な形でも、これまででしたらある程度はアクセス出来ていたのですが」
確かに、以前の閉鎖空間とは全く違ったようですね。最初、気がついた時見えたのは満天の星空と海とボート、それだけでした、神人も出てこない、世界には俺たち二人だけ、そんな感じでした。
ハルヒと話しているうちにいつしか島影が見え始めたんですが、その島には一切の灯りが見えない、全くの無人島の様でした。古泉が全く入れなかったのは倒すべき神人が居なかったからかもしれませんね。
「お伺いしたいのですが、実際のところ、どうやって閉鎖空間を破られたのですか？」
ハルヒと海に落ちて、ハルヒが笑って俺に手を伸ばしたら、皆さんのボートの灯りが届いたんです。
それ以上は、ま、秘密ってことにしておいてください。

「いずれにせよ、古泉の不用意な行動が引き金であった事には違いないでしょう、本当に申し訳ありませんでした」
そんな大丈夫ですから。顔、上げてください。

## 第二章　海の日の夜　第2節

森さんと一緒に船室に戻るとさすがに皆疲れたのだろう、ハルヒもかなたも可愛い顔をして眠っている。長門は薄暗い中、文庫本に没頭しているし、古泉はデジカメを一人操作している。

古泉、昼のバーベキューの魚、美味かったな。刺身まで作れるとは知らなかった。

「採れたてでしたから、それに、あれは刺身という程の物では無いです。爪で腹から開いて背骨と身の間に指を這わせて骨と頭を取り皮を剥ぐ、いわゆる手捌きというもので、新鮮な鰯ならではの漁師料理です」

森さんに話、聞いた。俺のせいで何か言われたんだろ、すまなかった。

「さすがにちょっと絞られましたけど、見える範囲に居る事を条件に朝釣りには行かせてくれましたし、生姜醤油で食べる鰯の刺身は褒めてくれましたから、それほどは怒っていないと思います。

しかし、昨夜は森と長門さんに一度に呼び出された時は正直ビックリしました。

普通でしたら閉鎖空間の発生は私が一番最初に気がつくはずなのに、

あの閉鎖空間はまったく異例尽くしでした。

ところで、伺いたいのですが、どうやって昨夜の閉鎖空間から脱出されたんですか？」

俺は何もしてない、ハルヒと話をしただけだ、そうしたらハルヒのやつ、急に立ち上がったもんでボートが転覆して、でもって気がついたら前たちの船が迎えに来てくれていたんだ。

「核心に当たる大切な部分を少々省略されたようですが、私の不手際が元ですので、とりあえずはそうしておきましょう」

なんだか何時もにも増して含みのある物言いだが、まったく俺の

言ったとおりだぞ。
「そうでしょうか、話していただけるなら、この写真を引き伸ばしてプリントして差し上げようかと思ったのですが」
古泉の差し出したデジカメの小さなスクリーンには水着でじゃれあうハルヒとかなたのバストショットが写っている。
「これは拡大ですので、実際は足元まできちんと撮れていますよ。Ａ４プリント、何ならＡ３プリントにさせていただきます」
巨大な向日葵の柄のワンピースのハルヒ、そのお天道様よりはるかに輝く笑顔が眩しいし、真っ白な素肌を際立たせる真っ黒なビキニのかなたも可愛い。かなたの腰のところには黒い布が巻きつけてあって、そう、バレオとか言うそうなんだが、そいつがひらひらするもんだからついつい目がそっちへ行ってしまう　が、実は着やせしていただけで結構ボリュームのありそうな胸元も、細い紐が食い込んだ背中も、それはそれは目の毒でついつい直視できなかったんだが、それを　大きく引き伸ばしてプリントしてくれるって言うのは、欲しい、欲しいんだが、俺のことじゃなくてハルヒの行動を古泉にばらすってのも気がひける、いや、そ　れは男としてやってはいけない事なんだ。どうだ、今度、サテンでコーヒー奢るから、アイスクリーム付けてもいい、だから、それ、プリントしてくれないか？
「私としては、報告書も書かなければなりませんから、お話を聞かせ頂くだけで、こちらの写真も、こちらの写真も、もうひとつこちらもおつけしますが」
ストライプのワンピースの水着を着た長門、ターコイズのビキニの上に胸元にフリルのついた同色のワンピースを合わせた朝比奈さん、究極のレアカード、真紅のＶラインネックのビキニ姿で悩殺ポーズの森さんのアップ、古泉、それは無いぞ、頼む、よこせ……

## 第二章　海の日の夜　第3節

古泉は結局いつものニヤニヤスマイルを崩さず、やむ無く俺は長門の向かいの座席に座り一眠りすることにする。
見るとはなく長門の文庫本のブックカバーを眺めていると携帯にメールが着信、こんな海上で電波が届くのか？　電波マークを見ると案の定、圏外なんだが。とりあえず着信したメールは……長門、情報操作、得意すぎだろう。　４通のメールのタイトルはどれも『検閲許可済』、添付ファイルに先ほどのハルヒとかなた、長門、朝比奈さん、もう一通は直立する長門と、長門の足元に飛び込んでビーチボールをトスしようとしている俺の写真。という事は森さんの写真はどうやら検閲削除されたらしい。長門、ありがと、すまないな。時計に文字が現れる。

ＹＵＫＩ．Ｎ＜　昨夜の危機回避のお礼

いや、助かったのは俺のほうだ。長門とかなたが教えてくれなかったら閉鎖空間に入ってしまったことすら気づかずにあのままになっていたかもしれない。
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　その蓋然性は認める

古泉も言っていたが、これまでの閉鎖空間とは随分違ったものだったらしいな。

ＹＵＫＩ．Ｎ＜　私と時計を結ぶ光子ペア通信も、かなたと時計を結ぶ高次元ナノチューブを用いた通信も限定的にしか機能しなかった
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　極度の異常事態、詳細は不明。貴方の時計から情報のダウンロードの許可を

そうか、この時計に記録されたデータが役に立つのか？
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　この間、有希姉さまとキョン先輩にお願いして改造させていただいたとき、若干のデバイスも内蔵させていただいたのです

それで、将来の対策とかに役立つなら、だいたい、こういった時の為にセットしたんだろ？
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　はい、では、ダウンロードします。解析は有希姉さまと一緒にさせてくださいね
何か、そうさな、俺にでも理解できそうな事がわかったら教えてくれると嬉しいかな。
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　了承

ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　まあ、有希姉さまったら、恥ずかしがらずにちゃんとキョン先輩に伝えればいいのに
いや、長門は長門の情報伝達の手法があるから、俺はそれで良いと思ってる。無口なかなたも、饒舌な長門もそれぞれの性分に合わないことだろ？な　ら、今のままで良いさ。だけど、万一俺が長門の言葉を間違って受け取る、そう、情報の伝達に齟齬だ、それが生じたと思ったら、かなた、お前が補足してくれ　たらいい。長門とかなたは言葉によらない、もっと高度な情報と思考の交換をしてるんだろ？

ＹＵＫＩ．Ｎ＜　貴方の演繹能力の進歩
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　良いな、有希姉さまのこと、本当に信頼してくださってるんですね
もちろん、かなたの事だって信頼してる。二人が俺を信頼し、頼ってくれている様に、俺も二人のことは絶対に信頼してるさ。
ＹＵＫＩ．Ｎ＜　私は情報統合思念体によって造られた、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース

ＹＵＫＩ．Ｎ＜　器としての私への過信は危険、上位の存在に自我を抹消される可能性、エラーの可能性を忘れないで
ＫＡＮＡＴＡ．Ｍ＜　私は、有希姉さまを信じてますよ
俺もだ、言葉だけでも、そんな恐ろしい話は聞きたくないよ。

ＹＵＫＩ．Ｎ＜　そう……でも……忘れないで

ハルヒの隣で眠りこけていた様にみえたかなたはむっくり体を起こすと、俺たちの方を見て、涙を浮かべた瞳をそっと手で拭った。長門はじっと文庫本を見つめている、だが、暫く前からページをめくる手は止まったまま。
俺は腕時計を口元から話すとかなたを向いて、精一杯微笑んで、首を左右に振った。

長門、冗談だろ？　な？

## 第二章　海の日の夜　第４節

港に近づいた旨のアナウンスが流れるとフェリーの乗客達はそぞろ車へと向かう。停船してから車に乗るようにとのアナウンスなんぞ誰も守っちゃいない。

良いのかという俺の心配をよそに、目覚めるなりトップギアーに入っちまうというはた迷惑な特技の主、そう、ハルヒは森さんを押しのける勢いで階段を駆け下りていく。おい、んな事してたら転んじまうぞ。伊達にスポーツ万能じゃないにしろ、転んでべそ掻く団長様なんて見たくないからな。

「何よ、私が転びそうになったらキョンが私に先回りして私を受け止めるなり、私のクッションになるなりすればいい事よ。

誰が泣きべそなんかかくもんですか！」

何だかんだ言いながら、俺を頼りにしているか、あるいは全く文字通り、俺をクッションか何かと勘違いしているか、そのどちらなのかは敢えて聞かない事にする。

「キョンこそ、足滑らせて転ぶんじゃないわよ。良いこと、団活だって家に着くまでが団活よ、気を抜くんじゃないわよ」

どこかの小学校の引率教員みたいなベタな台詞は止めた方がいいと思うぞ。

「森さんが皆さんをそれぞれお宅まで送ってくれるそうですから、後は車に乗る時と降りると時だけ気をつけてくだされば良いですよ。

彼女の運転はの確かさは折り紙付ですから」

古泉、そいつは取って付けたみたいなヨイショだなぁ。

お花見の帰りの出来事が頭をよぎったのは俺だけでは無いようだ。長門はさっさと助手席へ乗り込んだ。古泉とかなたは最後尾、俺はハルヒと朝比奈さん　に挟まれて中列中央という絶妙なシートに座ることになる。カーブでは朝比奈さんの方に倒れないよう必死に手

足を踏ん張るんだが、朝比奈さんはお構いなしに　遠心力のまま俺に体を預けてくださる。その時、俺はといえばハルヒを押しつぶさないよう、これまた必死になって手足を踏ん張っているので、見方を変えれば　その時俺は朝比奈さんを支える様にというか、朝比奈さんに体を密着させるようにというか、腕がビミョウなふくらみに触れるように身体を突っ張っているのだ　という事に気がついたのは自宅が近くなった頃、朝比奈さんが倒れ掛かってくるタイミングの一瞬前にハルヒに引き寄せられて、耳元で何度目かになる

「エロキョン」

の烙印を耳に噛み付かんばかりの勢いで告げられた時であった。

もちろんそのとき朝比奈さんは俺のひざの上に膝枕状態になって、

「ふえぇ、キョン君、ごめんなさいぃ」

と、これまた可愛い声を上げておられる。

古泉、今夜お前にバイトの呼び出しが来たら、それは俺のせいじゃない、事故だからな。わざとやったんじゃないからな。

「キョン、明日からＳＯＳ団のホームページの団員の紹介のところ、エロキョンに直しておきなさい。

いいこと、これは団長命令なんだからね」

僅かでも来訪者がいるんだから、それは止めよう、な、それより、古泉が色々写真取っていたから、活動記録の方に今回の記録を載せたらどうだ？

「古泉君、お客を呼べそうな良い写真が撮れてるかしら？

ＣＤに焼いて、今度部室に持って来ておいてよね。

良い、キョンなんかに渡したら駄目よ、ちゃんと私に直接渡して頂戴。

エロキョンがまたみくるちゃんの写真をくすねるといけないからね」

「はい、かしこまりました。

くれぐれも粗相の無いよう取り扱います」

古泉、ウインクは止めろ、、身を乗り出すな、息が近い、かなた、
何とかしてくれー

海の日紀行　完

## 第二章　海の日の夜　第４節（後書き）

次は　夏の物語その１「ガイア」ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９７４７ｋ／　です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8508k/

かなたへ　第十一部　海の日紀行

2010年10月8日15時02分発行